

留学生（非漢字圏）の日本語力は なぜあがらないか

シュテファン・カイザー

文芸・言語学系教授

鎖国がとけてヨコハマなどが開港すると、日本周辺で待機していたおおくの西洋人が日本に上陸した。英米などの商人・宣教師・外交官だった。そうしたひとびとはまっさきに日本語の学習にとりかからなければならなかったが、「日本語の文法書は？」という質問に対してかえってきたのは、「ありません」という、かれらの常識ではとてもかんがえられない返答だった。

この状況は実はいまでもあまりかわっていない。日本語の文法を記述した本はやまほどあるが、規範となる「日本語文法」なるものはない。それでは、外国人の日本語力を計る尺度はというと、主として『日本語能力試験』で、初級4級から上級1級まで4段階で受験できるテストだ。私費留学生のばあい、1級（学習時間900時間、語彙10,000語、漢字2,000字）合格が大学入学の条件となっているが、実際は2級（学習時間600時間、語

彙6,000語、漢字1,000字）や3級（学習時間300時間、語彙1,500語、漢字300字）の学生も入学してきている。

少々ふるいが、日本語能力試験の報告書がてもとにあるので、結果をのぞいてみることにする。平成8年度（1996）の分析がのっており、残念ながらあまりくわしいものではないが、母語のタイプによる各技能（聴解、文字・語彙、読解・文法）の平均点がみられる。ただ、素点ではなくて、全受験者の平均点が0で、標準偏差が1になるように標準化されたものとなっている。そこで日本国外で受験した漢字圏と非漢字圏グループを1級と3級のレベルで比較してみると、以下のようになる（括弧内は受験者数）。なお、欧州・ヨーロッパとあるのは、ヨーロッパの言語で、ドイツ語や英語などをさしているの、新世界の英語やスペイン語なども含まれている。

		聴解	文字・語彙	読解・文法
1 級	中国	-0.44 (7616)	0.16 (7615)	-0.08 (7609)
	欧州	0.35 (1303)	-0.36 (1303)	-0.37 (1303)
3 級	中国	-0.35 (8407)	0.20 (8402)	-0.04 (8406)
	欧州	0.50 (3041)	-0.22 (3041)	0.06 (3039)

人数がちがうので、単純比較は危険かもしれないが、傾向は一目瞭然だ。日本語をきいてわかる能力は圧倒的にヨーロッパがたかいが、文字が関係してくると、おおきく逆転してしまう。その傾向は漢字数がふえるほどに顕著になる。日本語の漢字表記が非漢字圏の日本語習得をむずしくしているわけだ。

なお、この試験が想定している標準的な学習時間を上記であげたが、報告書での級別の学習時間があがっている。全部を引用するわけにはいかないが、1級と3級のもっとも多いグループ（全受験者平均）の数字（パーセント）だけ以下に示しておく。

	1 級	3 級
201～300（時間）	（省略）	21.8
801～1000	25.1	（省略）

試験が想定している学習時間は妥当な

ようにもみえるが、1級では1001時間以上学習した受験者が52%もいて、3級でも60%にのぼっている。

日本語補講コース

研究生などとして入学してくるものについてはうけいれ教官の判断にまかされている。その教官の判断の材料は留学生本人の自己申告となるばあいが多いが、判断があまいのか、あるいは過大評価の自己申告のためか、結果的には日本語力がゼロに近い留学生もたくさんはいてくる。本学ではそのような学生には各学期のはじめにプレースメントテスト（PT）を課して、成績によって適当なレベルの日本語補講コースにふりわけられる。ただ、150時間の日本語学習相当・漢字100ほどのレベルに達していないひとは受講の資格がないものとして、次のPT以降まで、よそでそのレベルに到達できる勉強をすることになる。

日本語予備教育コース

一方、日本政府国費留学生のばあい、文部科学省が海外公館での面接などの情報をもとに留学生センターなどで日本語の集中コース（予備教育）をうけるべきかどうかを判断して配置する。週20時間、18週間の本学の予備教育コースに配置される留学生のほとんどがいわゆる非漢字圏の学習者だが、まったくゼロスタートのひとと、ある程度の日本語ができるひとがまじっている。「予備教育」という名称がしめしているように、この集中コースは大学院を受験しパスする日本語力をつける目標があるが、ゼロスタートの学生のほとんどがそのレベルに到達しないどころか、初級後半の補講コースのクラスで勉強をつづけなければならない。

なぜ上手にならないか

これにはいろいろな理由がかんがえられる。まずは、非漢字圏学者にとって、日本語の習得が一般日本人がおもっているよりも、ずっと困難なことがあげられる。

「悪魔の言語」

18世紀に日本文典をかいたスペイン人宣教師 Oyanguren の「悪魔の言語」が有

名だが、特に日本語の文字言語がふたつの面で世界にも類のない、たいへんな難関となっている。

複数読みの不合理

ひとつは、漢字とそのよみかたは1対1の関係にないということだ。1945字の常用漢字表で公認されている音訓は4086で、単純計算ではひとつの漢字が平均して2.1のよみをもっている。しかし、特に使用頻度のたかい基本的な漢字には、もっとおおくのよみかたをもっている漢字もすくなくない。そして、そういう基本的な漢字を最初におしえたりするわけです。ところが・・・

「人」はおぼえたけど症候群

「人」という字を例に説明すると、「ひと」ということばとしておしえることがおおいだろう。練習すれば、すぐよめるようにもなり、かけるようにもなる。それで、学生は「おぼえた」というきもちになるだろう。しかし、「日本人」にでくわすと、「いいえ、『日本ひと』ではなくて、これは「日本じん」ですよ」といわれてしまう。「三人」がでてくると、「いいえ、『三ひと』でも『三じん』でもなく、『三にん』ですよ、とダブルパンチをくらう。で、今度は「一人」という

のにであうと、いよいよテクニカル・ノックアウトです。もうそのままではたかいはつづけられない。だいたい、「音よみ」と「訓よみ」の概念そのものが、かれらにはほとんど理解不可能なように、ましてや複数の音よみや訓よみとなると、あたまのなかがもうまっしろ。

日本人の想像を絶する苦渋

この苦渋がなぜ日本人には理解できないかというと、自分たちがこどものときにおぼえた漢字は、ながい年月をかけて柔軟なあたまですこしずつ学習したことで、それからさきほどの例でいうと、「ひと」も「にほんじん」も「さんにん」も「ひとり」も、ことばとしてすでもっていたからなのだ。一方、留学生は成人として学習しなければならない。短期間でおおくの漢字を習得しなければならない。おまけに、同時に単語もおぼえていかなければならない（そして、文法の規則なども・・・）。

語彙も二重におぼえないと

それからもうひとつの問題は、一般語彙とそれ以外の語彙がちがっている点だ。「このあいだ」はおぼえたが、「先生に挨拶するときには、先日をつかいなさい。「かわ」や「やま」はおぼえたが、

「日本の河川」「山岳地帯」にはまるで役にたたない。

おぼえたかとおもえば、やりなおし、この悪循環ほどモチベーションをそぐものはないだろう。現在つかわれている世界のあらゆる文字システムのなかで唯一「訓」という不合理をつくって、いまなお漢字表記のなかでつかいつづけるツケは、漢字圏以外の外国人がちゃんとした日本語をほとんどおぼえてくれないというかたちで日本国民にまわってきている。わたくしカイザーのように、日本語そのものが専門で、しかも数十年かけて勉強している人間はそれなりのレベルには到達するが、道具としての日本語力を必要とする留学生はなかなか一人まえにはなれない。

解決策はないものか

日本人には、政治経済や安全体制に關する危機感はなさすぎるとよくいわれるが、日本語の表記についても同様のことがいえるのではないだろうか。99%の識字率をほこるとか、日本人には難読症が存在しないとか、漢字は優秀な文字だなどの神話のうしろにかくれて、表記は現状のままでよいとおもいこんでしまっている国民はどうかしているとしかしいようがない。

漢字使用の是非もかんがえなければならぬ（おなじような状況のなかでおりなり朝鮮半島やベトナムでは、漢字をすてていることの意味をもっとかみしめてほしい）が、ひとりひとりの日本人にとりあえずできることは、訓よみ、つまり和語を、かな表記にすることだとおもう（思慮ある日本人のなかにこれを実施し

ているモノカキもいるし、本稿でもそれでやっている）。この「ちいさな親切」は日本語の表記の透明性をたかめて、上記の「人」字のよみかたのかずをへらし、日本語をマスターできる外国人を確実にふやしていくことにつながるとかんがえる。

（シュテファン・カイザー 日本語教育）

